タイトル：Hello, 你好
著者名：金 圭信（きむ きゅしん）
あらすじ：山奥の小さな街で暮らす彼女は、毎朝霧に包まれた首都を眺めながらお粥を食べるのが日課。観光客が増え、街は賑わうが、彼女は静かに日々を過ごす。家族は首都で成功し、彼女も観光客に親切に接する。ある日、酔った観光客にタオルケットをかけ、静かな朝を迎える。
文字数：2,350 文字

彼女の街は、首都からバスで四時間ほど整備された山道を登って行ったところの終点にある。夏の明け方には、ここから見渡せる大きな首都全体を、薄い乳白色の霧が覆った。彼女は屋外に備え付けられた客席で朝のお粥を食べながら、この霧を眺めるのが日課だった。家族も観光客も、誰も彼もがこの霧が出ている間は眠りについている。古い陶器のスプーンと茶碗が小さな音を立て、彼女が時々咳払いをする。それだけしか、まだこの日を鳴らすものはなかった。

お粥を食べ終わって一通り眼下の首都を眺めた後、この街の古い寺に行って簡単に手を合わせた。参拝場の真上にある電光掲示板には、休むことなく、何かの文言が右から左に勢いよく流れていた。お賽銭箱は何年か前に、QR コードが記載された紙が置かれた簡素な楽譜立てのようなものに変わっていた。

少しずつ朝が近づいていた。今日の暑さの予兆を肌が感じ取っていた。入り組んだ石畳の階段を登ったり、降りたりしながら、彼女はこの街に並ぶ軒の数を数えていった。八十八の店を数え終えて、もといた場所に戻る頃には、太陽は確かに東に登り始めていた。

朝早くから観光客はやってきて、彼女は店頭に立ち、「Hello, 你好」と言って呼び込みをした。一番始めに店に来た二人組の背の高いコーカジアンのカップル相手に、適当な英語で簡単に商品の説明をした。彼らは「OK, thank you」とだけ言って、立ち去って行った。

日が昇るにつれて、観光客は増え、お昼頃には道をすれ違うのにも苦労するほどに、ごった返していた。観光客の声が一つの塊のように街を覆うなかに、「Hello, 你好」という声があちらこちらで、矢のよう飛び交っていた。

彼女の弟と妹は首都にある大学を卒業して、そのまま就職をした。なかなか給料もいいようで、賞与が出る月には彼女が信じられないくらいの金額を送金してきた。

この街に観光客が押し寄せるようになってからはまだそれほど時が経っていなかった。ある映画の舞台になったことが、きっかけだったが、彼女はその映画を観たこともなかった。高騰した土地を手放して街を出て行く人もいれば、ここを商機と思いきった借金をして、店を改築する人もいた。彼女の両親にはそういったことをする理由がなかった。祖父母は亡くなり、長女が店を継ぎ、次女と長男は首都で学位を取って、仕事をして、時々実家に送金をする。それ以上のものを求めることが、彼女の両親の現実的な一つの能力の問題として出来なかった。長女の結婚も、この我の強い娘には何を言っても無駄だと知っていた。ただ、もう少しこの観光のブームが早く来てくれていたらと、遠慮がちに望む程度だった。彼女に対するややもってすると、後ろめたい気持ちがあったが、彼らとて、店に立って商売をする以外に、その時は何もしてあげられることがなかった。

長い一日が終わる頃には、時間は午後十時を回っていた。観光客が増えるにつれて、首都へ向かうバスは最終バスの運行をこれまでより二時間も後ろ倒しにした。夜中になっても、一部の店は営業続けて、そうした観光客を乗せるタクシーが夜中待機していた。彼女

は手早く寝支度をして就寝した。祖父母は弟が買った真新しい薄いテレビで、Netflix で見つけた古い映画を見始めていた。

彼女は夢を見た。どこか見知った街を自転車で進んでいた。脇道に入ると行き止まりになっていて、そこから引き返しては、また違う脇道に入る。そうして、また行き止まりにぶつかり、引き返す。こうしたことが延々と続く夢だった。

酔った観光客が彼女の特等席で眠りこけていた。体をゆすっても起きそうもなかった。夏とはいえ明け方は少し冷たい。彼女は家からもってきた薄いタオルケットをその男にかけてやった。男の真向かいに座って、また眼下の首都を眺めた。全ては時が止まったかのようだった。音もなくただ、首都は薄い霧に白く覆われ、何一つはっきりしなかった。

最後に首都に行ったのはいつだったか。そこには交通渋滞があり、それを縫うように行きかうバイクの群れがあり、見上げきれない高層ビルがあった。今風な小奇麗な屋台があり、中空にはモノレールが通り、人々は自信に溢れて見えた。青色のモスクがあり、赤い寺院があり、カラフルなショッピングモールがあった。懐かしむ思い出は多くはなかったが、彼女はそうして冷凍保存された何かを、ほんの少しの間取り出して眺め、外気にさらされて溶けてしまわないうちにまた、胸の奥にしまいこむのだった。

弱い雨が降り始めた。彼女と観光客の男の頭上にある簡易なパラソルに雨音が当たっていた。雲はなかった。今日も暑い一日になりそうだった。青い空があり、雨粒が太陽の光を反射した。男は眠っていた。山の鳥が鳴き始め、始発バスの運転手が出発前にサイドミラーの位置を神経質に調整していた。

「彼はとうとうベストなサイドミラーの位置を見つけられないまま、バスの運転手としてのキャリアを終えるよ」

いつか弟がそんな冗談を言っていた。あの運転手のワイルドなカーブの曲がり方に誰もが一度は恐怖を感じるのだ。

そうやって観光客は今日も一度きりの思い出をこの街で作っていくのだと、目の前の男を見て思うのだった。この男は昨日ずいぶん飲んだのだろうか、一人旅なのだろうか、何を思ってこの国に来て、この街に立ち寄ったのだろうか。そんなことを考えているうちに、始発のバスは古いエンジンの音を立てて、出発していった。そのけたたましい音に男の体が少し反応したようだった。もうすぐ目を覚ますかもしれない。彼女はタオルケットを男からとって、店の奥に放った。昇りかけの太陽の光が彼女を照らし、雨は知らないうちに止んでいた。

男は目を覚まし、あたりを見回した。ひどく喉が渇いていた。

「Hello, 你好」と彼女は男に言って、コーラの缶を手渡した。